

# 城下町探訪 14

2009/7/2

## みずきりどて 東総堀と水切土手

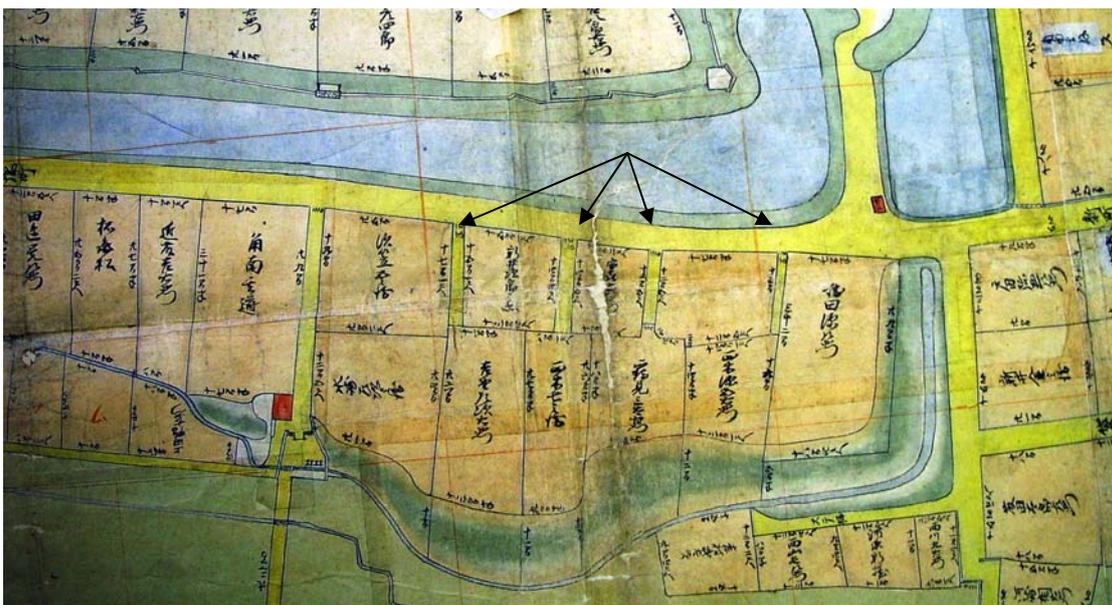
松本城の総堀（江戸時代の絵図は惣堀と書く）は埋め立てられて東総堀の一部だけが現在残されています。松本市役所東庁舎の東側から北門大井戸のある地点までが残存する東総堀です。総堀とは松本城の一番外側の堀という意味です。東総堀の東側に片側だけに武家屋敷が造られていたので片端という名前が付いたのです。本来でしたら南北の道を挟んで東と西側に



に武家地が展開するはずですが、西側は堀ですから東側にしか武家地を作ることが出来ませんでした。

- 総堀（惣堀）
- 水切土手
- 片端
- 東門馬出

松本城の東総堀の南側（縄手側）は明治 15～20 年頃に埋め立てられ、水切土手から南は明治 23 年に、そして、東門馬出の前面の堀は明治 29 年の水害で砂が入ったのをきっかけに埋め立てられ宅地化しました。

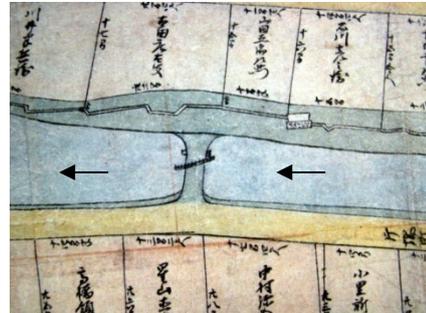


片端の北側には図のように東総堀に面した武家屋敷は出入りが可能ですが、その奥の捨堀土塁側の武家屋敷は出入り口がないので、片端の道から裏の武家屋敷に通ずる小路が確保されています。この小路は現在も確認出来ます。道が堀側にしか確保できない場所での工夫です。

昭和 8 年に東総堀に繋留した船で料理店が開業しました。現在も営業を続けているこの料理店の南側に現在も水切土手を見る事ができます。ここは残された東総堀の水を女鳥羽川に流すための水門が設置されています。先述のように総堀は埋め立てられていきましたが残った総堀の水を流す水路は確保され現在は地下に埋められた水路や蓋をされた水路で外濠小路と呼ばれる小路の下を通り、さらに縄手横町の端を流れ、縄手通りの北側の蓋をされた水路を流れて幸橋の北側で女鳥羽川に注いでいます。

### ○水切土手

さて、水切り土手とはどんなものかを説明します。東総堀の幅は 15 間（およそ 27 m）ですがそこに水を遮るように土手が築かれ、水を通す小さな穴が穿がたれていました。したがって北の方から流れ下る堀の水はここでせき止められ、少しずつゆっくり流下することになります。水野氏時代に作られた「信府統記」



には水切土手を「水持ち土手」と記述しています。すなわち、堀の水持ちをよくする土手という意味です。東総堀の北端の新町付近は 5 9 5 . 8 m、深志橋付近は 5 9 3 . 4 m、水切土手 5 9 1 . 1 m、上土会館付近は 5 8 9 . 6 m、一つの橋北側で 5 8 9 . 5 m となっています。（平成 16 年度松本城下町図 松本市教育委員会発行による）このように、東総堀の北と南では標高差が 6 . 3 m あります。

そこで北側の堀底を随分掘り下げて、南側の堀底と水平になるように堀は造られたはずですが、しかし、扇状地のことですから北と南の高低差はどうしても直せません。水切土手を設置しなかったら堀の水は低きに流れ北側の水深は浅くなってしまいます。それを防いで水深を一定にするために、北側の底からわき出す水にみあった水量を流下させる水切土手を設置したのです。

松本城の堀の水は総堀の南西に集まります。前頁の図をみてください、総堀の馬出の部分の土橋が 5 か所ありますが、これも水切土手の役目をしていました、外堀の太鼓門入口・北外堀では本丸裏門の土橋、さらに内堀の黒門の土橋も同様の役目をしていました。現在も後者の 3 つの土橋は小さい穴から水が流下しているのを見ることができます。

### ○総堀両側から先の尖った杭列を発見

平成15～17年に行われた総堀石垣改修工事（西側）および総堀石垣改修工事（東側）にともなう発掘調査により、先の尖った杭列が発見されました。



第1次調査地点の杭列



第二次調査地点の杭列



第三次調査地点〔片端側〕杭列



米沢城の杭列（米沢城発掘調査報告書 1994年）

この杭は米沢城に続く二例目の発見と言われています。杭は先が尖り黒く焼かれたあとがあり、「大坂冬之陣図屏風」にも描かれている防御用の杭と考える研究者と土塁の土留めの役割や波消しの為の杭とする研究者があります。また、これと同じ杭が平成3年北外堀北側からも発見されております。この杭の役割については今後の研究にまきたいと思えます。

